

# 地域医療研究へサークル

徳大医学部生

徳島大学医学部で医師を志す学生有志が、県内の医療の現状や課題を学び、解決策を探るためのサークル「地域医療研究会」を発足させた。勉強会や各地の医療施設での視察、研修を重ね、介護や福祉、保健を含めた地域

## 福祉施設訪れ研修

### 利用者から課題や解決策探る

医療についての幅広い知識を身に付け、将来的にへき地などで働く際に必要な総合的な診療能力を養う。大学によると、学生が独自に地域医療について研究するサークルは全国でも珍しい。

サークル結成を呼び掛けたのは、県内の医師不足解消などを目指し、十月から大学院ヘルスバイオサイエンス研究部に新設された「地域医療分野」の谷憲治教授。県が過疎地の医師確保を目的に、昨年からは毎年八月に山間部で開いている二泊三日の夏期地域医療研修に参加した学生を中心に声を掛け、一五年生の十九人が集まった。

利用者から聞き取りなど、課題や解決策探る。こうした知識はへき地を含む地域医療に携わる際にはもちろん、大病院でも患者の退院後の転院施設などを見据えて最

適な治療方針を考える上で生かせるという。部員は、顧問の谷教授の指導を受けながら、二週間に一回の勉強会や自習を通じて地域医療の現状や課題を研究。毎月一回程度は県内各地の医療施設を視察するほか、長期休暇を利用したへき地の医療施設での研修や、夏期地域医療研修に参加する自治医大生らとの交流を行う。

十三日に初めて行った



デイケア施設を訪れたお年寄りから利用状況などを聞く徳島大医学部地域医療研究会の部員。徳島市内のヘルスパーク

視察には、八人が参加。徳島市内の東洋病院を訪れ、清水寛院長らの案内で治療体制を学んだほか、併設のデイケア施設やグループホームで利用者から聞き取り調査をしたり、一緒にゲームを体験したりして介護保険の仕組みなどを学んだ。

部長で三年の兵頭沙梨さん(三)「徳島市南島田四」は「お年寄り」と接して、患者には病名だけでは分からない背景がある」と実感できた。しっかりと目標を定めながら地域医療の現状を学んでいきたい」と話している。

谷教授は「部員には地域医療について正しい知識を持ってもらうことも、この中から一人でもへき地医療に携わる人が育ってくれば」と期待を膨らませている。